

『立命館人間科学研究』の今後

——編集委員長着任にあたって——

『立命館人間科学研究』は、この7年間望月昭前編集委員長をはじめとした編集委員会の尽力により、着実に刊行されてきました。掲載された論文の多くは、立命館大学人間科学研究所のプロジェクトによるもの、あるいはプロジェクトに関わって行われたものです。

教育科学研究所を前身として2000年4月に設立された人間科学研究所は、広く人間と社会に関わる総合的・学際的研究を行うことを目的とし、さまざまな研究活動を展開してきました。開設以来、文部科学省による研究資金を継続して受け、大規模な研究プロジェクトを展開してまいりました。まず、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業（2000～2004年度）を受けて「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究」を実施し、続いて同事業・オープン・リサーチ・センター整備事業（2005～2009年度）を受けて「臨床人間科学の構築－対人援助のための人間環境研究」を、立命館大学の多くの学部・研究科からの参加と学外のさまざまな団体・個人の協力を得ながら、実施いたしました。

さらに2010年度からは、新たに文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」プロジェクトを立ち上げ、地域社会における対人援助の方法や制度について、より積極的に先取りする場としての大学をとらえなおし、そこでの教育方法をも含めて探求しております。

こうした旺盛な研究活動に支えられ、『立命館人間科学研究』には、数多くの論文が投稿され、近年では年2回の発行を継続しています。これらには、すでに実施されている研究プロジェクトの成果を報告するもののみならず、未知の研究の分野を切り開く新たな課題に挑んでいるものもあります。編集委員長を拝命したものとして、こうした特色を生かしつつ次なる展開を検討してまいりたいと考えております。

さて、『立命館人間科学研究』の今後を考えるために、最近の投稿論文についての特徴をみてみましょう。研究所の射程の広さに合わせて、非常に多様な執筆者による論文が掲載されてきました。11号（2005年度発行）から23号（2011年度発行）までの13号分、133掲載論文について、本雑誌の中心である投稿論文の筆頭執筆者をみますと、133論文中39が立命館大学所属の専任教員（教授・准教授等）によるものであり、50が大学院生によるものとなっています。これら二つがもっとも大きい投稿者集団となっています。この他に、助手・研究生・研修生・ポストドクトラルフェロー（PD）、リサーチ・アシスタント（RA）、など、さまざまな方が執筆された論文が投稿されています。さらに、立命館アジア太平洋大学、他の大学所属の研究者が執筆された論文もあります。

筆頭執筆者である専任教員の所属は、文学部、産業社会学部、政策科学部、応用人間科学研究科、先端総合学術研究科、法務研究科、言語教育センター、など、非常に幅広いものとなっています。大学院生の所属も、文学研究科、社会学研究科、応用人間科学研究科、先端総合学術研究科、政策科学研究科、理工学研究科、経営管理研究科、などであり、全学的な学術雑誌となっています。このよう

に、前号で望月前編集委員長が書かれているように、本雑誌は人間に関わる研究や実践について、ひろく学内の教職員や院生・学生からなる研究者が執筆投稿するという性格をもった雑誌として継続されてきました。今後も、こうした性格を引き継ぎ、関連する幅広い学術分野から投稿される雑誌として、発展させていくことが重要かと思われまます。

多方面から投稿される雑誌として継続・発展していくために、この雑誌はさまざまな工夫を行ってきました。第1に、査読制度の確立があります。現在、投稿論文については、2名による査読を実施しており、内1名は研究所外の研究者に依頼しております。このようなことを実施できているのは、編集委員会と事務局との連携、そして外部査読者のご協力の賜物です。一方において、今日学術情報の発信において、同僚審査をいかに適切に行い、さらには外部評価をどのように受けるかは重要な課題となっています。本誌においても、査読・評価についてはさらに検討を重ね、必要な改革を行っていく所存です。

第2に、学術情報の電子化の中で、内容のpdf化による冊子体とオンラインとの同時発行をほぼ同時に行うようにしております。今後も学術リポジトリや内外のデータベース等の動向もみながら、新たな状況に機敏に対応するように努めたいと思います。

今後の課題として、国際化と研究活動とのさらなる連携を指摘しておきたいと思います。まず、国際化の中での『立命館人間科学研究』のあり方について、今後具体的に検討していくことが重要となっています。英文での発行については、2010年に本雑誌から選び出した論文の英語版を研究報告書『ヒューマン・サービスリサーチ』の20号として発行いたしました(Sato, T. ed (2010) Collected papers from Human Services Reseach, Human Services Reseach Center, Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University, Kyoto.)。今後については、内外の学術の動向もみつつ、方針を検討していきたいと思っております。もう一つの課題は、人間科学研究所の多くの研究活動が社会のさまざまな活動に取り組んでいる点を、本雑誌の編集に生かすことです。例えば、さまざまに行われているシンポジウム等の企画の内容を、ゲスト・エディター制度を導入してうまく活用するのはどうでしょうか？

最後になりましたが、『立命館人間科学研究』の今後の発展のため、みなさまからの積極的御提案をお待ちするとともに、引き続きのご尽力・ご協力をお願いいたします。

2011年12月

立命館大学人間科学研究所所長
『立命館人間科学研究』編集委員長
松田 亮三